

# あの景色をいつまでも

鹿児島県 鹿児島県立大島北高等学校二年 千田 真帆

私は、あの光景を二度と忘れることはないだろう。それは、今年の二月九日のことである。

私は、幼い頃から島唄を習っている。きっかけは私の祖母だ。八十二歳になった今でも最前線に立つ唄者の一人である。私はそんな祖母が大好きであり、尊敬を抱いている。しかしここ数年、祖母は以前のように声が出せなくなり、歌いながらも咳き込み、苦しい表情を見せるようになった。

「もう、あと少しかもね……。」

私は、祖母がふいに口にしたこの言葉に悲しくなり、もっと祖母と一緒に歌いたいと願うようになった。

すると、昨年十二月、ある知らせが届いた。それは、祖母のほこらしや奄美音楽祭の出演だった。私は、舞台上で輝く祖母が見られるんだと思い、嬉しかった。すると祖母が浮かぬ顔をしてこう言った。

「私は、真帆と一緒に出ないよ。」

その時、私は、胸がどきんと弾む音がした。私も一緒に出たい。祖母の歌っている姿を一番近くで見たい。そう思った。

私は、これを聞いた瞬間、絶対に成功させようと思った。

二月九日、本番当日。私は大島紬、祖母は白紬を身に纏って会場へと向かった。出演者は私たち以外にも奄美大島を代表する唄者が勢揃いだった。その中でも大ベテランの祖母は楽屋に入った瞬間、全員が頭を下げていた。私はすぐく緊張してしまい、本当にここにいいていいのかという不安な気持ちになってしまった。すると、祖母が私の肩をポンと叩いて言った。

「大丈夫、いつも通りの真帆でいいからね。」

その言葉を聞いた途端、私は重荷が外れたような感覚になった。私ならできる。そう思えた。

実は、前日の二月八日は祖母の八十二回目の誕生日だった。そこでサプライズを決行することにした。それは、歌い終わった後に花束を渡すことだった。喜んでくれるといいなと思いい、私は舞台袖へと向かった。司会者が祖母と私の紹介をして、少し挨拶をした後に歌い始めた。会場は静まり、二曲歌い終わった瞬間、大きな拍手に包まれた。私の隣で歌う祖母は誰よりもかっこよく、百合の花のように美しかった。私も本番が一番いい演奏ができて、達成感に満ち溢れた。

祖母がインタビュアーを受けている間、私は舞台袖で花束を持って待機していた。

「では、森山ユリ子さん、後ろを向いてください！」  
この言葉を合図に花束を渡した。祖母は目に光るもの

後日、出演が決まり、思わずガッツポーズをしてしまったことは今でも鮮明に覚えている。そこから、練習の日々が始まった。私自身の課題である三味線の練習には力を入れた。私は、今回のほこらしや奄美音楽祭では囃子と三味線での出演だった。唄を支えるのは三味線であり、中学一年生の時に三味線を習い始めた私にとって、苦手意識があるものだった。自分のために、祖母のためにもっと上手くなりたいと思い、同じ会の先輩から三味線を教わった。

「三味線は、唄者に合わせるもの。強弱をつけて、唄だけじゃなく、三味線にも感情を込めるの。」

これは、教わっている中で心に残った言葉である。

時は経ち、二月に入った。私は、祖母と毎日練習をしていく中であることに気づいた。それは、以前のような歌声でそれできて笑顔で歌っていることだった。私は思わず、

「最近、調子いいね。どうしたの。」

と聞いた。すると祖母は笑顔でこう言った。

「真帆と一緒に舞台上に立てると思うと嬉しくて。」

を溜めながらそれを受け取った。そして、祖母はこう言った。

「みなさんのおかげで最高の誕生日になりました！」

ほこらしや奄美音楽祭は大成で幕を閉じた。帰りの車で祖母は何度も、「私は幸せ者だよ」と言っていた。

「ばあちゃん、これからも島唄続けてね。」

「もちろん、まだまだ頑張るよ。」

私は、この言葉を聞いて涙が出たが、誤魔化すように笑って見せた。

二月九日、私はあの景色をいつまでも忘れることはないだろう。

「これからもよろしくね、ばあちゃん。」

